2022.03.13.　栄光のために死ぬ Part1　Mac 牧師

おはようございます。JD 牧師の代講です。カルバリーチャペル・カネオへのライブ配信へようこそ。日曜日の朝は、2 つの礼拝があります。第一礼拝は、通常「聖書預言・アップデート」に専念し、第二礼拝は「聖書の学び」です。しかし、今日は 2 つのパートに分けての学びをします。この最初の学びでは、「ヨハネの福音書 12 章 20 節～26 節」を一緒に読みたいと思います。繰り返しますが、「ヨハネの福音書」です。可能な方は、今朝の聖句を読みますので、ご起立ください。そして、待望の祈りをしましょう。「ヨハネの福音書 12 章 20 節」から始めます。

ヨハネ　12

20 さて、祭りで礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシア人が何人かいた。

21 この人たちは、ガリラヤのベツサイダ出身のピリポのところに来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。

22 ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピリポは行って、イエスに話した。

23 すると、イエスは彼らに答えられた。「人の子が栄光を受ける時が来ました。

24 まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。

25 自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世で自分のいのちを憎む者は、それを保って永遠のいのちに至ります。

26 わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいるところに、わたしに仕える者もいることになります。わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます。」

祈りましょう。今朝、この学びを主が祝福してくださるようお願いしましょう。

天のお父様。何よりもまず、あなたの真理の御言葉に感謝します。主よ、今お願いします。あなたの聖霊の御力によって、私たちとここで出会い、私たち一人一人にはっきりと御言葉を語ってくださいますように。そうすれば、私たちはそれに耳を傾け、聞き、そのため自分自身に死ねるのです。私たちはこの時間をあなたに集中し、借り物だと自覚しながら惜しげなくお捧げします。私たちはあなたを愛しています。イエシュアの御名において、あなたがなさろうとしておられることに感謝します。イエスの御名によって祈ります。アーメン。

ご着席ください。今朝の学びのタイトルは、「栄光のために死ぬ」です。説明したように、2 部構成の学びでこれは第一部です。タイトルを主に心から感謝します。多くの方に話した通り、私は学びのタイトル付けがそんなに得意ではありません。これは、言わば自然にそうなりました。私にそれが突き刺さりました。何よりもまず、これは正に、イエス・キリストの死がもたらすもの。栄光です。そう思いませんか？これは他の誰にも真似のできない死であり、永遠の栄光です。ありえません。起こり得ません。 私たちがタイトルを軽んじないのを願います。"栄光のために死ぬ"　人がこう言い、考えるようには。「栄光のために、死ぬぞ！」いいえ。それよりもはるかに大きなものです。イエスは栄光のために死なれ、栄光のうちによみがえられました。大きく違います。華麗に演出するような人の考え方とは。彼らは出ていく。キリストは戻って来られる。（会衆：アーメン）主との歩みの中で、私たちも栄光のために、死んでいくべきなのです。私たちは神の栄光をたたえるために、自分に死ぬ必要があります。これはおそらく、この学びで私たちが到達できるように私が祈る、主な重要点です。しかしまた、この本文には、神の御言葉の一貫性を示し続ける驚くべき詳細がいくつかあります。すごいです。また、ここで語られているこの例え

話は、短いながらも非常に力強いので、より良い視点を持つべきでしょう。特に、その背景となる文脈や、私たちが主に従っていくことを選択するなら、主との位置関係を含めると尚更です。そのすべてが、今朝の本文に込められています。では、主のお許しを得て、これらの真理を示すため、御言葉を吟味し、解説していきたいと思います。まず、ヨハネの福音書の独自性を見て、それから、今朝の本文に入る前に、いくつかの背景を簡単に説明します。ということで、ヨハネの福音書に取り組みましょう。この福音書の決定的な違いの 1 つは、イエス・キリストの神性を示しているのは、多くの人が知っていることでしょう。これが、私にとってのヨハネの福音書の主要なテーマです。イエスは神である。（会衆：アーメン）
この事実が、多くの人を躓かせるのです。多くの公言するクリスチャンが、この事実、イエスが神であるということに躓いています。父なる神、子なる神、聖霊なる神は、決して切り離すことができないことを知ってください。三位一体、1 つの神です。そして私たちは、その機関の仕組みを完全に理解する必要はないのです。ただそのまま理解すればいいのです。（会衆：アーメン）
イエスの神性に関して、使徒ヨハネは「栄光」という言葉をよく使います。旧約聖書の「栄光」という言葉は、神にのみ許された言葉でした。ですから イエスの栄光を見ることは、神の栄光を見ることです。神の栄光だけでなく、神からの栄光でもあります。だからこそ、使徒ヨハネは、この福音書の中で、このことをしっかりと伝えているのです。多くの教師が、ある人をキリスト教に改宗させると、たいてい次の質問が出ます。"聖書のどこから読めばいい？"　殆どの教師が言います。「ヨハネの福音書です！！」
聞いたことありますか？　私は、新改宗者にそうするよう言うため、ここにいるのではありません。神の御言葉は虚しく帰さないからです。（イザヤ　55：11 参照）また聖霊は、すべての人の必要としているものを正確に知っておられるからです。しかしポイントは、この福音書が、イエスの神性、あるいはキリストの神性に関連して、どれほどの影響力を持つかを示すことです。このことは、ヨハネが目撃した多くの記録を正確に論じていることと同様に、イエスの働きとその神の目的についての全体像を把握するのに役立ちます。用語索引などを使っている人が、ヘブライ語やギリシャ語を調べ始めると、お～、そこに価値ある情報を見つけますね。特に、この「ヨハネの福音書」に。さて今朝は、この聖句の直前に起こった出来事を説明することで、この聖句の文脈を理解したいと思います。なぜなら 12 章の冒頭で、イエスがエルサレムに凱旋されることが語られています。群衆が叫んでいる箇所です。
「ホサナ、ホサナ！主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。」（ヨハネ　12：13）
これは、人々がイエスに対して叫び求めたのです。この時点で、イエスの名声はユダヤでほぼ頂点に達していました。人々は、それらの奇跡をすべて目撃したか、あるいはイエスがされたそれらの奇跡について聞いたかです。そのためイエスは、"イスラエルの王 "と呼ばれるようになりました。それを考えてください。しかし私たちが知っているように彼らが自分たちの王のために描いた絵は、苦しみのしもべではありませんでした。しかしこの瞬間、イエスは人々から礼拝され、神であることを示しています。神だけに礼拝する（出エジプト 20：5 参照）と書いてあります。そしてパリサイ派の人々は、自分たちのことを棚に上げていました。彼らは、イエスに対する人々の反応に腹を立てていたのです。実際、ヨハネによる福音書 12 章 19 節の後半に、彼らが自分たちの間で議論しているような記述が記されています。彼らの動揺が伝わってきます。
ヨハネ　12
19 それで、パリサイ人たちは互いに言った。「見てみなさい。何一つうまくいっていない。見なさい。世はこぞってあの人の後について行ってしまった。」

これがパリサイ人たちです。怒って、互いに指さし合っています。これは内輪もめの最たるものです。彼らは互いに話し合っていて、むしろ文句を言い合っていました。「見てみなさい。何一つうまくいっていない。見なさい。世はこぞってあの人の後について行ってしまった。」この 19 節の部分は、この後の展開の基調となる部分です。では、このようなイメージを持ちながら、本文の最初の 2 節をもう一度見ましょう。神の御言葉を再度読みます。

20 さて、祭りで礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシア人が何人かいた。

21 この人たちは、ガリラヤのベツサイダ出身のピリポのところに来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。

ここで止めます。このギリシア人たちは、礼拝に上ってきた人たちの中に混じっていて、彼らも礼拝をしていたのを示していて、祝祭のことは知っていたようです。彼らは、一部の人が指摘するようなギリシャ語を話すユダヤ人ではありません。というのは、ギリシャ語を話すユダヤ人はギリシャ系ユダヤ人と呼ばれました。「使徒の働き 6 章 1 節」にそのことが書かれています。彼らは、ユダヤ教への改宗者、あるいは異教の神を畏れる者、あるいはその両方であった筈です。様々なバックグラウンドを持った人たちが集まっていたのでしょう。というのも 「ギリシア人」という言葉は、世全体を簡単に意味するのを示唆するものでした。パリサイ派の人たちが叫んだことを思い出してください。「世はこぞってあの人の後について行ってしまった。」この特定のギリシア人の正確さに疑問が残るとしても疑問でないのは、このギリシア人たちが、ユダヤ人のベールの向こう側を見ているようであることです。これは、イエスの働きにおける転機です。それが分かります。21 節に、「この人たちは、ガリラヤのベツサイダ出身のピリポのところに来て、」なぜピリポのところに来たのか、その理由は語られていません。ピリポはギリシア人の名前であり、また、ピリポがガリラヤで育ったから、ユダヤ人と異教徒の混血だったと提案する人がいます。実はイザヤ書 9 章 1 節の終わりに、次のように書かれています。イザヤはガリラヤを異邦人のガリラヤと呼んでいます。あの辺りがどうなっていたのか、分かりますね。その地域の町や都市は、こうした混血の人々のために敬遠されました。そういう町の 1 つが、ナザレです。ですから、ナタナエルが言うのです。

「ナザレから何か良いものが出るだろうか。」（ヨハネ　1：46）

このせいです。私たちは、その答えはわかっていますね。ナザレから出たのは、良いものだけです。神は良い方だからです。イスカリオテのユダを除く弟子たちは皆その地方の出身でした。ピリポは名前がギリシャ語だったせいか、知られていたのかもしれません。しかし、1 つだけ確かなことは、世のギリシア人たちは、ピリポがイエスを知っていることを知っていた事。分かりますか？　彼らは、ピリポがイエスを知っていることを知っていました。「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。まるで「あなたがイエスと仲がいいのは知っているぞ。」と言わんばかりに。「私たちは、あなたが私たちをイエスに会わせることが出来ると知っています。イエスに会いたいのです。」このイエスに会いたいという願いは、見るだけではありません。違います。これはそういう意味じゃないんです。彼らは、イエスと話をしたい、イエスと会話をしたいと思ったのです。それがここでの意味です。これが私の祈り、ギリシア人たち、あるいは今の世の人たちのために私たちが祈っていることなんです。人々がイエスに会いたい、イエスと話がしたいと思うようになること。質問は、こんにちの世の人々は、私たちの中にイエスを見るでしょうか？　私たちがイエスに近い存在なのを、またイエスに繋がっている事を人々はどうやって知るのでしょうか。彼らは、私たちにその質問をするでしょうか？「イエスに会いたいんだ。」私たち

は、世と何か違うのでしょうか？　私たちは、自分たちのことを区別しているのでしょうか。言葉以外で、私たちならではの特徴がありますか？　この前の木曜日、レイトゥ牧師が以前の職場で、同僚がこう言っていたと話してました。「お～フランス語を許して～。」で、夜が更けると、誰かが彼のところにやってきて言うのです。「ねえ。」聖書について質問しに来る。彼らは何かを見たのです。私たちも同じことが言えるでしょうか？　ひっくり返してみると、私たちは、イエスが、ある人々にとって手の届かない存在であるかのように振る舞っているのではないでしょうか。私たちは、心の中で霊的に聖化されて、特定の人にイエスのことを話す余裕がなくなってしまっているのでは？　その代わり私たちは、自分がいかに尊大で敬虔であるか見せますか？「あの人は救われてない、話す必要ない。」と。どちらかの態度が間違っているのです。極端に間違っています。自分自身を吟味する必要があります。また、お互いに責任を持ち続けることも重要です。人々は、私たちの中におられる世の塩、世の光であるイエスを見る必要があります。良いものを守り、照らし出すこと。それが私たちの使命です。それが私たちの召しです。真理を求める心を持った人は、イエスに会いたい、話したいと思うでしょう。しかし、繰り返しますが、イエスが私たちの中に見えねばならないのです。イエスが私たちの中におられることを人々に知らせる最も効果的な方法の 1 つは、私たちの互いへの愛によってです。特にこんにち。私たちは、この互いへの愛を本当に理解する必要があります。数ヶ月前に行った学びについて、キリストの兄弟と話をしていました。「マタイの福音書 24 章 12 節」にある一節をもう一度調べてほしいというのです。お読みします。

マタイ　24

12 不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えます。

今、私たちが生きている時代について語っています。「多くの人の愛が冷えます。」ここで「愛」という言葉が物語ると思うので、より要点を絞って見ていきたいと思います。なぜならここでの「愛」は、兄弟愛の "フィリア "ではなく、実は "アガペ（無条件の愛）"だからです。そう考えると、最終地点につながることに変わりはありませんが、状況が変わります。というのは、このように主に対してだと主張する多くの人々の愛が今、冷めているのを語っていると思います。だから、本来、人に向けるべき愛もどんどん冷めてしまうのです。分かりますか？　主への愛が薄れれば、どうして兄弟を愛することができますか？これが、私たちの中におられるイエスを世が見ることができない理由なのでは？私たちの愛は冷めてしまったのでしょうか。もしそうであれば、私たちは神を求める必要があります。なんとしてもその愛を再燃させるのです。私たちは責任を問われます。このような愛の表現がなければ、私たちは単に敵を助けることになり、サタンはそれを好むのです。22 節と 23 節、ピリポは今、ギリシア人の要請に基づいて行動しようとしています。イエスもそうでしょう。神の御言葉をお読みします。

ヨハネ　12

22 ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピリポは行って、イエスに話した。

23 すると、イエスは彼らに答えられた。「人の子が栄光を受ける時が来ました。

繰り返しますが、ピリポはギリシア人の要請に応じて行動し、その行動は、アンデレに伝えることでした。こういう疑問が湧くでしょう。なぜ、彼はアンデレに言いに行ったのか？　もしかして、アンデレとピリポは仲が良かったのか？　二人ともベツサイダ出身だから？　そうかもしれません。でも、ここでは別のものだと思うんです。思うに ピリポが相談したのは、良いことでした。イエスはすでに 12 人の弟子たちに、何をすべきで、何をすべきでないかを命じておられたからです。それが一役買っているのかもしれません。「マタイの福音書」10 章 5 節と 6 節に記されています。お読みします。

マタイ　10
5 イエスはこの十二人を遣わす際、彼らにこう命じられた。「異邦人の道に行ってはいけません。また、サマリア人の町に入ってはいけません。
6 むしろ、イスラエルの家の失われた羊たちのところに行きなさい。
ですから弟子たちは、異邦人のところに行ってはいけないと分かっていました。しかしここでは、異邦人がやって来たのです。ですから、おそらくピリポとアンデレは、この違いを理解しながら自分たちで推論したのです。イエスが仰ったことと違って、今、彼らが私たちのところに来ている。イエスに報告した方がいい。このイエスへのメッセージの故に、イエスはその時が来たと宣言されたのでしょう。つまり、今がその時なのです。時が来ました。このギリシア人の行為が、人の子にとって、地上での働きのクライマックスが近づいており、まもなくイエスが、栄光を受けることを示すものでした。これが引き金でした。これが働きを変えたのです。その時が来たのです。
注意点：イエスはギリシア人の要求を直接一切取り上げておられません。
イエスの返答は、「人の子が栄光を受ける時が来ました。」次の 2 節では、その栄光がどのようなものであるかを語ります。しかし、その前に「ヨハネの福音書」で、この「時」という言葉が使われた 9 つの場面の内最初の 3 つを簡単に見ておきたいと思います。そうすると、ある種のテーマが見えてくると思うのです。このことを本当に理解できるように祈ります。その 1 つ目が、2 章 4 節にあります。3 節から読んで、その背景を説明します。神の御言葉をお読みします。
ヨハネ　2
3 ぶどう酒がなくなると、母はイエスに向かって「ぶどう酒がありません」と言った。
4 すると、イエスは母に言われた。「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません。」
ここに多くの事があります。これ自体を学ぶつもりはありませんが、私が言いたい点は、イエスはご自分の時がまだ来ていないと表現されているということです。イエスが栄光を受けられるその時、それがまだ来ていないのです。事実、イエスが水をぶどう酒に変えられたときでさえ、ご自分の手柄にもされなかったのを留意ください。その手柄は、宴会の主が花婿に渡し、言います。「一番いいものを最後に取っておいたんですね。」イエスは仰いませんでした。「あれはわたしでしたよ。」ー(笑)ー　でしょう？　そうではなく、あれは、弟子たちがイエスの栄光を理解し、イエスを信じ続けられるよう、されたのです。そこにはまた、マリアの最後の言葉が記されていますね。
「あの方が言われることは、何でもしてください。」（ヨハネ　2：5）
しかしポイントは、イエスの時が来ていなかったということです。そして、2 つ目は 7 章 30 節にあります。お読みします。
30 そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、だれもイエスに手をかける者はいなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。
まだです。これは神のタイミングです。世が、神のタイミングを決定しません。彼らはイエスに手をかけることができませんでした。イエスはご自分の時を示す出来事が何であるかを知っておられたからです。3 つ目は、8 章 20 節にあります。文脈理解のため 19 節からの神の御言葉をお読みします。
ヨハネ　8
19 すると、彼らはイエスに言った。「あなたの父はどこにいるのですか。」イエスは答えられた。「あなた

がたは、わたしも、わたしの父も知りません。もし、わたしを知っていたら、わたしの父をも知っていたでしょう。」
20 イエスは、宮で教えていたとき、献金箱の近くでこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。
テーマが分かりますか？「まだ来ていない。まだ、その時は来ていないのです。」時はまだ来ていません。19 節で、彼らがこの質問をした時、「あなたの父はどこにいるのですか」イエスの答えられ方を見てください。「あなたがたは、わたしも、（わたしの父も）知りません。...仰ったことが分かりますか？　答えられ方が分かりますか？　それ自体が学びなんですが、そこを指摘したかったんです。この小さな真実が大好きです。皆さんもその筈です。再度、誰もイエスに全く手を出せなかった。できなかったのです。その時が来る前に、まず何かが起こる必要があったのです。それが何であったかが分かります。それは、世がイエスに注目し始めることでした。それが、このイベントでした。そして 23 節、「その時が来ます。」繰り返しますが、「何の時なのか？　主イエスが栄光を受けられる時です。さて、私たちはどうでしょう。こんにちの私たちの歩みは？　その時は、イエス・キリストを信じると同時にやってきます。私たちは主を讃えねばなりません。私たちが行うすべてのことに、主に栄光があるのです。私たちクリスチャンには、こう言う機会や選択肢はなく、これからもないでしょう。「時はまだ来ていない。」皆さん付いてきていますか？　神を讃えるということでは、こう口にする選択肢はないのです。「時はまだ来ていない。」信じているとすぐにその時がやって来ます。私たちにとって、この時は常にあります。私たちは神を讃えるのです。　「今」そして、その「今」が問題なのです。私はこのように言う理由は、イエスの例え話の多くが「主人がいないとき、しもべたちが何をしていたか」という事実が根本的な問題の中心になっているからです。皆さん聞いていますか？　彼らは、主人がいない間に主人を讃えたのでしょうか？　それが、私たちにとっての「今」です。これが本当のテストが起こるところです。主人がいない間に。仕事への関係で、考えてみてください。いいですか？　上司が出かけていて、彼は、みんながやることをやっているのを期待しています。しかし上司が不在になると、どうなるのが普通ですか？同様に、今日、JD 牧師がいないから走り回っている人を見かけます。いや、冗談です。ー(笑)ー　皆さんのことをチクります。ー(笑)ー　でも私が言いたい事分かりますよね？　それがテスト段階です。私たちはそのテスト段階にいます。
質問：私たちは、主人が与えて下さったものを基に、やるべきことをやろうとしているのか。
なぜなら上司が帰ってきて、すべてがうまくいっているのを見たら、良い上司は褒美をくれます。世俗的な感覚での話です。超自然的に、それを考えてみてください。私たちは報酬を受ける資格さえないのに、それでも報酬が約束されているのです。忠実なしもべは主人を讃えると言ってよいでしょう。そう思いませんか？（会衆：アーメン）　宇宙の唯一の支配者となると、私たちが本当に神を讃えることができる方法は、たった 1 つです。この本文の次の 2 節に示されています。神の御言葉をお読みします。前置きが長くなりましたが、結論です。私たちは、生きるために死ななければならないのです。この 24 節で、イエスは一粒の麦に例えられ、ご自分が死んだらどうなるかを表現しておられます。他の多くの例え話同様、イエスは、植物、農業を使われます。なぜか？　庶民がそれを理解するからです。彼らは、イエスがそれらの例え話で仰ることを完全には理解していなくても、ある程度は理解するはずです。しかしこれを聞いて、人々の心を奮い立たせる必要があったと考えることができます。この例えを話すことでイエスは、時が来たと仰るだけでなく、ご自分が栄光を受ける時が来たことを表現されたのです。しかし、そ

の栄光は死ぬことによって来ます。こんにちの私たちを考えます。私たちは、その成就を目の当たりにしています。こんにちに至るまで。言わば、最も神聖な穀物の死。その結果、どれだけの穀物を生産したかを見てください。呆れるほどです。間違いありません。私たちは、この例え話の副産物です。それは良い事です。それから本文の 25 節でこう続けられます。「自分のいのちを愛する者はそれを失い、」これが、私たちが殆ど死んでいる理由ですよ。分かりますか？　私たちが殆ど死んでいる理由です。「自分のいのちを愛する者はそれを失い、」ですからね。失うかもしれない、ではなく、失うのです。皆さん理由が分かりますか？　私たちは、自分のいのちを愛する人々が、なぜそれを失うのかを分かりますか。この世で自分のいのちを愛する人たちが、罪を認めないからです。これは、人が持つ霊的盲目の最悪のケースです。霊的に盲目の人が、神の御言葉を聞いて理解することは不可能です。そのため、彼らは心を頑なにし続けます。何度も何度も真理を拒絶し、罪を受け入れ、そして、彼らにとって、イエス・キリストは必要ありません。救われる必要がないと信じている人にとって、救いとは何でしょうか。彼らは命を失い、罪の中で死ぬのです。栄光のために死ぬ機会を失うのです。世の感心事や事柄、この世の罪に心を奪われたままの人は 唯一の命を失うことになります。最も大切な永遠のいのちです。しかし、罪を認識しなければ、悔い改めはありません。そして悔い改めない限り、救いはありません。本文 25 節を続けます。ここでイエスが使っておられるのは、さらに強い言葉です。「この世で自分のいのちを憎む者は、それを保って永遠のいのちに至ります。」このイエスの発言を聞いて、当時のユダヤ人たちが何を思ったか想像できますか？　こんな声が上がったかもしれません。「私たちは、ローマ帝国の支配下にあるんだぞ。なんだか、今の生活が嫌になってきた。こんな環境は嫌だ。それが私にとっての永遠の命を意味するの？」ーそうとも言えません。それは聖書にはありませんが、私が言っている意味はお分かりですね。そういう会話が出たかもしれないという事です。具体的にどういうことなのか？　という問いかけがあったはずです。自分のいのちを憎むということは、どんな支配者下でも、与えられた自分のいのちを憎むことではありません。そういう意味ではありません。それは、私たちがこの世で生きてい罪の生活を憎むことです。
皆さんは分かりませんが、もしかしたら自分だけかもしれません。しかし、罪が問題なのです。神を知れば知るほど、罪が見えてきます。こんな状態なのに、ここに執着して、どうやって喜べますか？　全世界は、真の生ける神が象徴するすべての聖なるものと対立しています。アメリカ。私はこの国を守るため 30 年間を費やしました。恥です。今、私が心配しているのは、退職金がもらえるかどうかだけです。最終的にこの場所がいかに悪であるか、この結論に至ったとき、私たちは、この世でこの命を、私たちが住んでいるこの罪深い世を憎み、神の栄光のために自分に死ぬのです。（会衆：アーメン）
世を憎むこの命は、永遠に、その命を守り続けるのです。しかし再度、あなたが、この世での生活を愛しているなら、この程度では済まず、ただ悪化の一途をたどります。あのマスクが問題だったと思うなら、あなたは、明日起こるべき事が何か決してわからない。聖書から正しく結論づけることができます。真の栄光は死ぬことで得られる。栄光のために、死ぬ。栄光のために、キリスト・イエスにあって自分に死ぬことです。　ですから、イエスは本文の 26 節で続けておられます。お読みします。

ヨハネ　12

26 わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいるところに、わたしに仕える者もいることになります。わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます。」

イエスは既に、ご自分の死が永遠の命のために必要だと示唆されています。イエスは私たちのために死なれました。イエスは、なおギリシア人に答えず、この 26 節から、すべてを包み込むような表現で語

り始めておられます。皆さん分かりましたか？「わたしに仕えるというのなら、」こうは仰いません。「迷える羊の中で、私に仕える者があれば、特定の民族的背景を持つ人が私に仕えるなら、富める者も貧しき者も私に仕えるなら、」いいえ違います。「わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。」です。人種間の緊張があるこの風潮の中、こんにち目を見張るものがあり、すべて悪魔の仕業で、特に黒人の場合、世論調査では黒人の 68%がクリスチャンだと主張しています。私はそれを疑問に思います。本当に？しかしあなたはこの憎しみを買うのですか？　お～日曜日の朝教会で、「イエス様、イエス様」と叫びながら満たされ、教会から出たとたん、白人は……　本当にイエスに仕えているつもりですか？　聖典に戻ってください。間違いなく他の場所にもあります。しかし、私は自分が知っていること、見たこと、そしてこれからも見続けることを話しています。「(誰でも) わたしに仕えるなら、」と聖書は語ります。さて、12 章の冒頭を思い出してください。イエスは "イスラエルの王"と呼ばれていました。彼らはイエスに向かってそう叫びました。ユダヤ人たちが、群衆がそこにいたのです。この王が、人々に仰るのです。「わたしについて来なさい。わたしに仕えるなら父はその人を重んじてくださいます。」聖典に書かれている通りです。分かりますよね。しかしこの王であるイエスは、どこかへ、それほど王らしくないように思える方法で行かれるようでした。恐らく彼らの頭の中には、こんな疑問があったのかもしれません。”死ぬことがどうして輝かしいことなのか？”　というのは、本文のどこにも、群衆がこれを聞いて興奮したというようなことは書かれていないからです。実に次の学びでは、彼らがこのことに悩んでいたのがわかります。しかし、非常に興味深いことに 救世主の誕生は、祭司長や律法学者によってよく調べられていたのです。しかし、彼らは興奮したわけではありません。なぜなら聖書にこう書かれているからです。「ヘロデ王とエルサレム中の人々も、救世主誕生の知らせに困惑した。」「マタイの福音書 2 章 3 節」です。お付き合いください。なぜなら、この記述があります。

東方から賢者たちが来て、その王（救世主）に会うためにやってきた。（マタイ　2：1）

そして、さっきのこの本文、西方からギリシア人が王に会いに来ます。全世界が救世主のことを耳にしたのです。しかし救世主が、死なねばならないという点については、宗教指導者たちは全く調べていないようです。お～彼らは、イエスがどこで生まれるかを見ようとし、そこですべてを話しました。「ああ、ここだ。あそこだ。」「彼を殺すつもり？」「そうだ。」でも、いざ死となると、どうやら誰も聖書をまったく見なかった。事実彼らは、イエスが死ぬのを見るのを楽しみにしていたのです。疑問が湧いてきます。彼らが本当に探していたのは誰だったのか？　考えてみてください。これは多くの預言者によって予告されていたことです。少なくとも、聖書の記述に基づけば、彼らは神の誕生を喜ぶべきであり、困惑すべきではありません。彼らは、イエスが死に行かれることを興奮するのでなく、本当に心配した筈です。皆さん付いてきていますか？　民衆もそれに倣いました。どうやらあまり質問しなかったようです。では、人々に何を教えていたのか？　人々は自分で調べたのでしょうか？　私たちは、同じ質問をし、またその質問をする必要があります。私たちは、誰を求めているのか？　もし、誰かいるなら私たちは、このままで良いのでしょうか？　私たちは、主の来臨を待ち望んでいるのか、それとも困惑しているのか。(会衆からの声) 神の祝福がありますよう。私も待ち望みます。私たちは、ある日「ホサナ、ホサナ」と叫び、そして翌日、真理を十字架につけるのですか？　彼らは、私たちのように神の御言葉の全助言を持っていたわけではありません。それは、言い訳になりませんが、その中に、彼らは入っていたのです。私たちには完全な記述があります。私たちには全体像が見えています。強味とさえ言えるでしょう。しかし、イエスに従うということに関しては、こんにち同じような反応があるようです。永遠の命のために墓場に

行くという人はほとんどいません。神の栄光のために死のうとする人は、ほとんどいないようです。しかし事実は、 イエスに従うことを選ぶなら、この死は必須なのです。なぜ、死ぬことがそんなに重要なのか？　また分かり易く言うと、私たちは何のために死ぬのか？
答え： 私たちは、イエスが死ぬために来られたことのために死んでいるのです。
私たちは自分自身に、罪に死んでいくのです。教会で最も語られることのないテーマ、罪です。こんにち、タブーすぎます。毎週日曜日、そのことに触れるべきだと思います。世は、あなたに罪を思い出させることはありません。そこに誘い込むのです。 私たちは罪のために死ぬ必要があり、その罪が死んだままであるよう祈る必要があるのです。私たちはしばしば、十字架につけられるべき罪を復活させてしまいます。神だけがそれを乗り越えるのを、助けることがお出来になります。イエスが唯一の答えであり、私たちはイエスに従わねばなりません。最後に ローマ書 6 章をご覧ください。1 節から 6 節までを読みますが、このことが実感として私たちの胸に刻まれることを祈ります。「ローマ人への手紙 6 章」です。1 節、神の御言葉をお読みします。

ローマ　6

1 それでは、どのように言うべきでしょうか。恵みが増し加わるために、私たちは罪にとどまるべきでしょうか。

2 決してそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうしてなおも罪のうちに生きていられるでしょうか。

3 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。

4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。

5 私たちがキリストの死と同じようになって、キリストと一つになっているなら、キリストの復活とも同じようになるからです。

6 私たちは知っています。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅ぼされて、私たちがもはや罪の奴隷でなくなるためです。

私たちはまだ罪を犯しているのでしょうか？　ーはい。私たちは罪の奴隷であるべきでしょうか？　ーいいえ。私たちは、様々な意味で罪の奴隷ではありませんし、そうであってはなりません。違います。イエスは世の中の罪のために死なれ、その過程で栄光を得られました。それに対する私たちの応答は、御父を賛美することであるべきです。罪を軽く考えてはいけません。そうではなく、深刻に考えてください。私たちは罪の中に生きてはいけないのです。しかし繰り返しますが、むしろ栄光のために、死んでいくのです。カポノ、上がって来て、賛美で祝福してください。ご起立ください。祈りましょう。愛する天のお父様。もう一度、主よ今朝、ここで私たちにお会い下さった事をあなたに感謝します。すべての御言葉が受け取られ、あなたにより、頑なな心が砕かれたことを祈ります。私たちはあなたを頼り、すべてをあなたに依り頼みます。主よ、私たちはあなたを讃えたく、またどうか自分自身に死に、あなたのために、あなただけのために生きれるよう私たちに新たな聖霊を与えてください。あなたが他のすべてのものを提供下さるのを知っています。私たちはまず、あなたを求め早くあなたを求める必要があります。今朝、あなたが喜んでくださったことを私たちがここであなたと出会うことによって、これからも祝福され続け

るのを祈ります。私たちはあなたを愛し、感謝します。救世主イエス・キリストの力強い御名によって祈ります。アーメン。

メッセージ by JD Farag 牧師カルバリーチャペルカネオへ
http://www.calvarychapelkaneohe.com/
Calvary Chapel Kaneohe47-525Kamehameha Hwy. Kaneohe, Hawaii　　筆記 hukuinn7